

私の日本語教育、日本語研究の歩み

—＜責任の言語学＞序説—

田中 寛

“Knowledge of language is the doorway to wisdom”

言語の知識は、智慧への扉である。

——Roger Bacon

目 次

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 言語形成と言語環境 | 7. 日本語と異言語(2)—中国語の世界で— |
| 2 専門職、天職という意味 | 8. <責任の言語学>という自己命題 |
| 3 私の中の言語体験 | 9. 対照研究と日本語教育 |
| 4 言語探究の出発点—自覚の端緒— | 10. 日本語教育史研究への指向 |
| 5 海外技術者研修協会の日本語教育事業 | 11. 言語と文学のはざままで |
| 6. 日本語と異言語(1)—タイ語の世界で— | 12. おわりに—私の日本語研究の現在— |

1. 言語形成と言語環境

私は大学卒業とほぼ同時に財団法人海外技術者研修協会に入職、関西研修センター日本語班に配属され、日本語教師としての一步を踏み出した。1974年6月のことである。以来、今日まで海外技術研修生を振り出しに一般社会人、留学生（学部生、大学院生）に対する日本語教育に携わる一方で、日本語研究も志向してきた。また、連動してタイ語などの外国語研究、日本語教育史、植民地教育史研究などにも取り組んできた。さらに、人と人との出会いを機に歴史、文学にも知的好奇心をはせてきた。かれこれ半世紀近くに及ぼうとする経緯を逐一綴るのもおこがましいが、少しばかり振り返ってみたい。なぜ、言語から、周辺領域に「拡散」していったのか、その背景についても語ってみたい。

何事にも長続きしない性格であることは自らよく悟っているところだが、一貫して思考の核としての日本語と向かい合ってきたということでは、まず自分にとって（小さな）誇りとしてもよいであろう。家族、周囲の支えと健康でいられたことにも心から感謝したい。回顧抄録として「吾は如何にして日本語教師になりしか」という拙文（『外国語学会誌』50号、大東文化大学外国語学会）があり、そこでも日本語教師と日本語教育をめぐる筆者のさまざまな歩みを記したが、以下では、別アングルから、私が日本語、言語研究そのものに向き合ってきた経緯について綴ってみたい。

その前に、筆者の言語形成について述べておくのが適切であろう。言語の研究と教育に

取り組む者にとって、どのような言語環境で育ったかが出発点となる。生地は九州の熊本である。市内黒髪町字下立田 552 という番地まで覚えているのは、戸籍謄本などを取り寄せたことが何度かあったからである。現在は市区町整理により市中央区黒髪町と変更している。小学6年（1962年）の8月まで育った。翌9月2日に故郷を離れ、大阪に出ることになった。早くに父を亡くし父親代わりとなった長男は大阪の飲食店で調理師の修業していたのだが、生活困難だった親兄弟を呼び寄せることにしたのだ。熊本から急行2等夜汽車で15時間の旅であった。離郷という過酷な体験は「母方言」喪失と「異方言」との遭遇であり、私にとって少年期の、言語的にも最大の出来事であった。

到着直後から言語環境は激変した。学友もできず、よくいじめられたことも覚えている。靴下も履かず、田舎から出てきた「山猿」のように言われていた。今でも覚えているが、仲間に入れて欲しいと言いたいとき、「かてて」と何度も言ったのが伝わらない。彼らは私の発話にまったく反応せず、暫くして「よして」という言い方を女子生徒に教えてもらった。肥後（熊本）方言では「かてる」は「加える」という意味で使われるが、「よす」とは相当離れている。かりに反対に関西人が熊本に転校したとして「よして」と言っても伝わらないのと同じである。そう思うと、深刻になることもないと思った。言葉にはなじめず、暫くは意地になって方言を使っていたようにも思う。その女子生徒の名前は忘れたが、卒業間近に私を呼び出して、泣いて謝ったときは、救われた気がした。孤独な環境は中学生になってからも続いた。入学早々また豊中から布施（現東大阪）に転校、高校も同じ学区に進んだ。高校に上がってからは次第に関西弁にも慣れていったが、当時寂しさをまぎらすためによくテレビを見ていたことが言葉に馴染むきっかけになったようである。とにかく、あのねちねちした関西弁はどうも馴染めず、嫌だった。

こうした原体験を、1988年当時、生前の寺村秀夫氏に語ったところ（おそらく自己紹介で自分の少年時代の言語体験を順番で語った時だったと思う）、直下に「それは非常に貴重な体験をしましたね、言語の研究をするうえで重要な事です」と言われたことを覚えている。関西人が東京に進出するのはわけが違ふし、まして、現代のように交通も通信も自由になって方言が近くなって、さほど違和感をおぼえなくなった時代とはずいぶん違っていた。少年の私にとっては国内にいながら異文化体験の連続であった。

日本語教師になり、さまざまな国籍の技術研修生と出会い、また集中授業で簡単な日本語を丁寧に話すことが「職業病」になり、自然と方言臭さが抜けていったようにも思う。それでもどうかした拍子に九州方言のアクセントが出てしまうことがある。今でも「出身はどちらですか」と聞かれることもあるが、言語形成期とは裏切らないものだ。音声に敏感な研究者でなくともわかるということは恐ろしいことである。悔しくもあり、また半面、嬉しくもある。故郷を忘れてはいなかったからだ（今も肥後方言には関心があり、数冊の研究書も所蔵している。暮らした歳月が短かろうと故郷は故郷である）。

日本語教師になって声を出す職業についてことから、それまで持病であった扁桃腺肥大がピタリと止んだのは幸運であった。それがもとでしょっちゅう風邪を引いていたのであ

る。また、自分で言うのもおこがましいのが、声がよく通ることから、日本語教材の録音などさせられたことも、「矯正」に役立ったように思う。

就職して三年後、私はタイ王国バンコクに出向を命じられた。そこでタイ語に出遭う。相応にタイ語も習得したのだが、四年余の後に急遽帰国を命じられ、東京本部配属となった。31歳の時である。九州、大阪、バンコク、東京の次は中国である。二年半後に退職、裸一貫で中国の大学に向かったのは34歳のときであった。初級日本語教育の壁にぶつかって新境地をさがしていたのである。このときの経緯の詳細は「わが青春の日本語教師」に書いているが、思えば人生の大転換であった。それまでタイ出向も含めて10年近く在職したのをあっさり辞めて、未知の大陸へ行くのだから、あたかも戦前戦中の大陸浪人のような覚悟である。大博打のようなものであった。

向かった先は内陸部の湖南省。これは中国を理解するのは地方に住まなければ分らないと思ったからだ。また湖南は、毛沢東、劉少奇をはじめ、近代中国の革命家、思想家を多く輩出したところである。これは私が大学時代に学んだ近代思想史の「現場」でもあり、私にとっては願ってもない赴任先であった。湖南省は中国でも最も方言が豊富などところともいわれる。私の中国語も相当鍛えられた。中国体験については、あとで詳しく述べることにしたい。35歳のとき、大学院に進学するために一年半後に帰国。また東京暮らしに戻った。41歳のときに東京（調布）から埼玉（坂戸）に移転した。2000年に現住所（志木市）に移転、以来、埼玉住民である。以上が私の言語環境の履歴である。

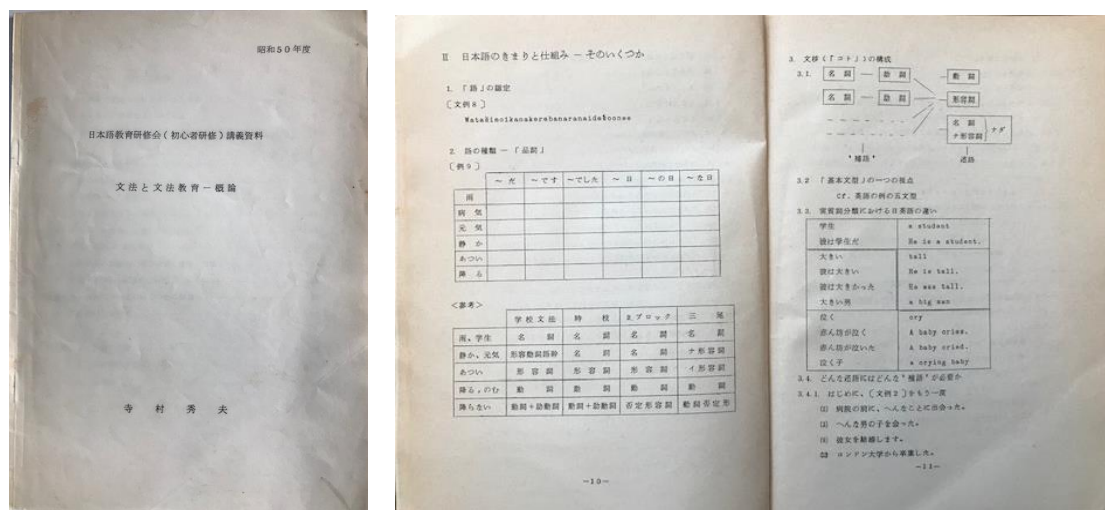
一方の配偶者についても紹介しておく。中国東北部黒龍江省牡丹江に生まれ、2歳から北京で暮らした。紅衛兵の一員として文化大革命を体験し、山西省の農村に“車隊”として配属される（「下放」と称される）。当地では臨時のアナウンサーなどをつとめた。その後北京大学に進み、情報数学を専攻、卒業後はコンピューター技師として北京電算機研究所エンジニアとなる。1982年に技術研修生として来日。1985年夏に再来日。以来、数か所の大学の中国語非常勤講師として中国語を教える傍ら、翻訳にも携わっている。周囲からよく何語で話していますか、と訊かれるが、長年日本で暮らせば日本語である。息子も中国語を習っているが、あくまで第二外国語で実践力は乏しい。妻はもちろん、中国人の友人や家族とは中国語で話しており、バイリンガルの環境である。毎日のように日本語と中国語の発想の違いを知らされる。言語習慣のみならず発想思考様式の違いなど、書物では得られない情報源である。中国はもはや私にとっては外国ではない、第二の母国である。そして妻はどんな学者よりも、かけがえのない言語、生きた異文化理解の教師である。

以上が私の言語形成、家庭の言語環境である。

2. 専門職、天職という意味

さて、日本語教師となった私は当然言語学や国語学に向き合わなければならないわけだが、大学の専攻は歴史学だったので、なかなか意識の切り替えができない。言葉や言語には興味はあったが、専門的な知識は一般並みである。歴史学の勉強の傍ら中国語も相応に

うちこんではいたが、実地での訓練はまだまだだった。大学院を出た者に比べれば所詮は第二外国語である。教材の準備、教案の作成などに追われながら、時間の合間を狙って専門書を読もうとするがなかなか集中できない。初心者研修を二年目に受講した。そこで寺村秀夫先生（以下、敬称略）の講義を受ける。会場は大阪上六にあった大阪外国語大学であった。そのときの教材が残っている。『昭和 50 年度日本語教育研修会（初心者研修）講義資料 文法と文法教育—概論』と題された B5 判 40 数頁の冊子である（下図）。当時はワープロなどももちろんなく、和文タイプライターで丁寧に打たれたものだ。自分で打てば一時間に 2, 3 枚がいいところだ。冊子には何とか初心者が日本語に興味をもつようにとの思いが伝わってくる。寺村秀夫の情熱をそのとき痛いほど感じたのを覚えている。ちなみに二年目は現職者研修がそれぞれ夏の一週間行われた。講師の先生には、経験ゆたかな佐治圭三先生（大阪外大）、玉村文郎先生（同志社大）もおられ、言葉に対する関心が徐々にではあるが、深まっていった。



日本語を教えるのは、別に日本語教師にならなくてもできるわけだが、職業として日本語を教える、つまりプロとなることは、当然ながらさまざまな手法を身につけなければならない。教材作成や毎日の小テスト、練習問題の添削などなど、勢い専門書を読む時間も削がれることになる。授業で外国人学習者から発せられた質問を逐一まじめに時間をとって考えることもない。そのときは貴重な体験だと感じて、うたかたのように消えてしまう。メモしておいても散逸するのが普通で、そこから何かを紡ぎ出すことは至難の業である。当初は自分なりの日本語雑学ノートを作って、気がついたことをメモしておいたのだが、ただそれだけで終わってしまう。また、宿直の夜の時間を利用して、言語、日本語に関する記事を何冊もスクラップしておいたが、これもただ紙類が残るだけで、そのときの関心、情熱はいつの間にか消えてしまった。

“The limits of my language are the limits of my world”

言語が限定されれば、自分の世界も限定される。—— Ludwig Wittgenstein

たとえば、誤用例から一定の文法規則を発見したり、既成の知識を修正したりする努力は並大抵ではない。多くの日本語教師が日々の授業、授業準備などに追われてしまうなか、形となる業績を残すことは難しいのだろうか。たしかに言語研究者が何冊も専門書、研究書を出すというのは身近をみまわしても限られている。大部分の日本語教師は宝の持ち腐れ、ではないが、得られたはずの貴重な知見を形にすることなく、時間を過ごすことになる。教材を作り、教材研究をしても、どこかに日本語学校の延長的なところがある。これは語学の研究、教育に携わる者の逃れられない環境なのかもしれない。

そうした仕事は、人文科学の研究者が数冊の研究書を出す背景とどう違うのだろうか、と思うことがある。数年前『高橋和巳の文学と思想』（コールサック社）に編著者のプロフィールを書くことになったが、著書がないことに、正直困った。専門の研究書は数冊はあるが、その書名を書くわけにはいかない。社会に開かれた著作がないのだ。かろうじて、私は日本語論の著書名を書いたわけだが、一冊でも「夏目漱石の言語と思索」のような類書があれば、と落胆的な羨望を抱いたものであった。言語を研究する者は社会的な著作がない。これはいつも自己韜晦的に思うことの一つである。言語学者、日本語学者としての立ち位置であれ、一般書を書かなければ真の研究者ではないとある人から教わったことがある。その意味で私は研究者の有資格者ではない。表現者の末席にいる思いである。

2019年の夏には中国のふたつの大学で基調講演をする機会があった。東北部の延辺大学、そして北京から二時間あまりの山東大学である。講演の機会は私の日本語教育、日本語学研究の歩みを振り返ることとなったが、冒頭で、私は臆面もなく次のように述べたのである。古希を間近にした「自己批判」の思いからであった。

私は大学を卒業と同時に、日本語を教えるという、まったく身近な道具を使って収入を得る仕事に就きました。これは一面幸運なことでもあり、また肩身の狭いものでもありました。私は日本語を教えること考えること以外に社会に役立つことを考えなければ申し訳ない気持ちになりました。あまりに身近過ぎることに負い目、引け目を感じたのです。それから私の葛藤、煉獄が始まりました。普通の平均以下の日本語教師になり、日本語を研究してはならない、と心に決めました。

およそこんな風に述べたのは、たとえば法学を学んで弁護士や社会に役立つ仕事に就くことと比較して、この仕事、職業は世間から同見られているか、という思いがいつもあった。友人にどんな仕事をしているかと訊かれたときも「日本語を教えている」とは恥ずかしくて言いくかかった。特に、ここしばらくコロナ禍のなかで介護や医療に携わる人のことを常に思う。人が汗水流して営業や製造の仕事をしているのに、自分が汗をかいていない。そういう率直な思いはどうしても抱かされる。もちろん、社会はそれぞれの持ち分でできているのだが、自分自身の実感としての話である。

例えば、天職という言葉の意味を考える。辞書には次のような意味がある。

①天から授かった職業。また、その人の天性に最も合った職業。「医を天職と心得て励む」(小学館『大辞泉』)

②天から授かった職業。またその人の才能・性格にふさわしい職業。「教師を天職と考える」(大修館書店『明鏡国語辞典』)

③[天から授けられた仕事の意]自分の気質・能力にふさわしいものとして、その人が生きがいに行っている職業。[誤って、聖職の意味にも用いられる]

(三省堂『新明解国語辞典』第八版 2020. 11)

上等な説明である。だが、一つ一つ検証していけば分からないことばかり。意味をつけること自体罪な話である。①にある「天性」とは何か。それはどうやって自覚するものなのか。「生まれつきの」「持って生まれた性質」とはいうが、「天性のバネ」「天性の運動神経」は分かるが、「天性の楽道家」「天性のそそっかしい人」といっても本人が自覚していないことも少なくない気がする。そして②の「才能・性格」にしても、③の「気質・能力」にしても、それをどうやって知り、測定すればよいのか。また「ふさわしい」というのも何が基準になるのか、思いこみか一過性的なものなのか。そして、③にあるように、これが厄介だが、「ものとして」という認識の在り方は一種の飛躍があり、転位の仕方が何とも無責任というのか不透明である。さらに「生きがいにする」とはどういう意味か。「生きがい」の対象があったとして、それを「生きがいにする」という「にする」とは、どのようなタイミング、努力が必要なのか。どのような転機、契機が必要なのか。自然に「生きがいになる」ことはないのか。同様に「生きがい」とは次のようにある。

生きがい：生きていることに意義、喜びを見いだして感じる、心の張り合い。「生きがい(生きていくための心の支え(目標)を見いだす(求める)／生きがいを感じる(=a.生きていてよかったと思う。b.もっと強く、長く生きなければと思う)(同上)

私は労働の意味を常に考えていた。それは父の死後、母が片腕ひとつで私たち兄弟を育てたことをありありと覚えているからだ。天職も何もなかった。あらゆる仕事、職業がその時々天職でもあった。「何か仕事はないですか、何でもいいですから」と近所の誰彼ともなく訊いていた小柄な母の、華奢な背中をいまだに忘れることができない。

考えてみれば「天職」という言葉は無きにひとしい。あるとすれば特権的な臭さが匂うので、個人的には好んで使いたくない。人は働く動物である限り、職業に貴賤はないというように、特別な意味を与える必要はないように思う。

子どもの頃に将来なりたい職業は何か、と大人が問いかけることがある。子どもに夢を語らせるのはいいことかもしれないが、サッカー選手、野球選手といったところでなかなか行けるものではない。パイロット、医者も大変な努力が必要だ。お花屋さん、看護婦さん

ん、保母さん、電車の運転手、などなど。だが、野球選手になりサッカー選手になり相撲の関取になり、体調を崩していつ辞めようかと何度も思ったことがある、といったスランプのときの証言を聞かされると、天職などないと言いたくもなる。天職というのは、それこそ生涯を閉じようとする瞬間に思っていたものではないだろうか。

毎年暮れにテレビで放映される、「トライアウト」という番組がある。戦力外通告をされた、つまり失業したプロ野球選手がもう一度再起を期してテストを受けるのだ。人生を賭ける日。そこで自分の実力をアピールしようとするが、うまくできないこともある。そして球団からのオファーを待つ。もう一度グラウンドに立ちたい。家族が見守る中、結果を出せない苦悶の日々。そうした人たちの努力を想うとき、自分は過酷な人生の淵に立ったことがあるのか、という自問がある。

3. 私の中の言語体験

人はさまざまな体験、経験を通して自らの言語形成を継続していく。そこには見えざる力も大きく働いているようである。また、時間の経過によって濾過されてくることがある、年齢とともに見えなかったものが視えてくる。次の教えは仮定法過去の自戒。

“If we spoke a different language, we would perceive a somewhat different world”
もし、私たちが異なる言語を話すとするなら、世界も異なって見えるだろう。

—— Ludwig Wittgenstein

私にとっての大きな言語体験といえば、上に述べた少年時代に九州の田舎から大阪に転居したときの「方言接触」である。今でも大阪弁はぎこちないところがある。12歳から27歳まで15年間かかったのではほぼマスターしたともいえるのだが、生粋の大阪、関西育ちの人からすれば及第点はつけられないだろう。それはそれで仕方がない。

もう一つは少年時代、住んでいた家の背後に大きな精神病棟があり、収容されている患者がよく歌を歌っていたことである。夜も歌声が聞こえた。一見何でもないようだが、あの人たちがなぜ精神を病んで閉鎖された病棟にいるのか、分からなかった。もの珍しさに近くに行ってみると、とてもやさしい話し方をして、自分がどうしてここにいるかわからない。出して欲しい、と訴える。そこで、話される言葉の意味を考えていたように思う。なぜ彼らは周囲と違った境遇、待遇をされなければならないのか。この体験は異言語というよりは、異文化接触と関係があるのかもしれない。

忘れてはならないのが、大人たちの戦争体験・記憶の会話であった。真夏には眠れない熱帯のような暑さから抜け出して、めいめい縁台に集まって夜の更けるのも忘れて、戦争中の体験談に明け暮れるのである。まだ戦争が終って十数年しかたっていない。運よく外地から生還した人たちもまだ三十代、四十代の働き盛りの男たちだった。戦争の体験談は生々しく、言葉が体験を紡ぎ出す意味を体験していたように思う。もちろん、少年時代に

そんな高尚なことを考えるわけがなく、後からそう思うだけなのだろうが、言語と体験を語るうえで、忘れてならない記憶であることは間違いない。

中学生の頃、住んでいたところ（布施、現東大阪）は在日朝鮮人の多く暮らす一帯だった。クラスにも**在日朝鮮人の子弟**が学び、朝鮮語は身近に聞かれた。一時続けていた新聞配達の配達先にも在日朝鮮人の家屋があった。今里、猪飼野のある地域は日本社会から隔離され、孤立したような一帯であった。また、兄の勤める料理店に手伝いに行くことが日常的だったが、そこに来日したタイ人がよく訪れた。彼らはキックボクシング（日本語の俗称で、タイでは「ムアイタイ」と称する国技）の若い選手たちで日本に興行に来ていたのだ。**異邦人との最初の接触**だった。それから十数年後、タイに出向することになるとは、どこかで体験がつながっていたとしかいえない。

また、直接の言語体験ではないかもしれないが、1960年代末期から70年代にかけて席捲した**大学紛争の言語状況**がある。等身大の言語とアピールする言語との乖離を自分ながら考えたこと、即ち既成の価値概念や観念を言葉はどう克服しうるかを考えた体験である。反政治的文学潮流として「内向の世代」が登場し、古井由吉の「杳子」に遭遇した時の衝撃は非常に大きかった（村上龍や村上春樹はさほど感じなかった）。それまで読んでいた日本語の世界とは異質な、深い拡がりを感じた。混沌とした二〇代の言語体験である。

そして日本語教師となり、多くの国籍の研修生と出会い、日本語を、言葉、言語を対象化する日常となった。こうして私には幾層にも固有の言語体験があったように思う。その人の言語観を考えると、こうした時系列的観察（内省）は意味あることである。

4. 言語探究の出発点—自覚の端緒—

多くの日本語学研究者、日本語教師が留学生に対する日本語教育がその端緒であったことを思うとき、私の体験、すなわち私よりも年長の社会人研修生に対する日本語教育から出発したことは、言語の社会性について最初から考える機会、試練を与えることとなった。そして、その下地として、言語学ではなく、歴史学という関心があったことも大きい。

しばしば言われることであるが、日本語教育に携わる人はむしろ言語学出身でないほうがいい場合もある。そこで思い起こされるのが寺村秀夫氏の経歴である。戦争体験をもつ寺村は大学は大阪外専（大阪外大）で英語を学んでいたが、その後京都大学法学部で学んでいる。『寺村秀夫論文集Ⅱ』（くろしお出版、1993）収録年譜によれば、寺村秀夫は敗戦当時の思いをこうのべている。「小学校時代は国民学校教育を受け、天皇を神格化し、天皇は軍の最高統率者。政府の最高権力者という中で育てられ、それに合わせて自分の人生観、世界観を作り上げてきた。そこへ敗戦。すべてが虚像、虚構であり、欺瞞であったことに気づかされる。ニヒルの1、2年を過ごし、価値観の180年度の転換」。戦時中は軍国主義の教育（少国民教育）をうけ、同じ年譜によれば昭和19年6月から学徒動員、翌年には芝浦電機に勤労働員としての日々を送っている。敗戦当時17歳の寺村秀夫は、時代の大転換のなかで、言葉の持つ重みを実体感していたのではないか。言語研究の根底に、こうした

価値観の大転換という「原体験」があったことをあらためて考えてみたい。

それまで日本語という母語を意識していなかった私は、いきなり言葉の前に引きずり出される格好になった。母語の解体、である。日本語の授業は平日の午前中3時間があてられる。午後は日々の小テストの採点、宿題の添削、そして次の日の授業の準備にあてられるが、慣れてしまえば一時間もあれば終わってしまう。残りの退勤までの時間は自由に過ごすことが許されるが、ある者は新たに教材を作ったり、教案を書き直したり、また専門書を読む時間もあつたりするのだが、これがどうにも集中できないのだ。言語専門の学科、専攻を出たわけではないので、まさに「八百屋に行って肉をくださいという感覚」に近いものがあった。1970年代は生成文法をはじめ、多くの日本語文法の成果が世に問われていた時代で、また、変形文法や生成文法に関する訳書なども出て、言語研究も活発になっていたのだが、そのどれを取り上げても数頁も読み進まないうちに睡魔に襲われる。『国語学』、『言語』、『言語生活』、『日本語教育』といった雑誌も並んでいたが、必要に応じて参照するという程度、顔を洗って気合を入れ直して向き合うも、なかなか頭に入らない。そういう毎日だった。ときには外部から講師をまねいて、勉強会を開いたりすることもあった。ペルシャ語、インドネシア語の講習会などで、日本語教育に役立つ教室用語などを覚えたに過ぎなかった。やはり短期集中教育の日本語に神経が「やられて」いたのだろう、右から左に抜けて行った。

そうして日々が労働のサイクルに回されると、教師は見られていることに気づかなくなる。そのことに気づき始めたのは数か月経ってからのことだった。どうも学習者の反応がおかしい、自然ではない。ある教師はその学習者を「理解が遅い」とか「馴染めない」とか簡単に解釈、評価する。だが、表面的にはそうであっても、学習者はいつも環境に慣れるはずがないのだ。言語、語学、外国語というのは、学びたいという意志、希望、期待があつてこそ身が入る。実習のための日本語といっても、それは一時的な道具に過ぎない。教える側と教えられる側との乖離は最初から分かっていた。それなのに教師は「あの学生は不真面目だ」とか「怠け者だ」といった評価を下すのである。語彙や文型を教えていて、よく「これは入った」「これは入っていない」と、まるで製品チェックするような雑談をしているのを耳にするたびに何となく憂鬱になった。「入った」「入らない」といった理解度をあれこれ詮索するのが日本語教師の一種の職業病のように思われたのである。いかにも表層的な観察ばかりに追われて、学習者というとらえかたをしていないのが不満だった。もう一つの憂鬱があつた。短期集中コースが終ると、教員は受入れ企業側に当該研修生の日本語学習の成績評価の報告書を出すことになっている。毎日テストの採点、最終試験の評価などを書きこみ、簡単なコメントを記入する。いわば「内申書」である。たった数週間しか接していないにもかかわらず、それを書くのは正直辛かった。

何か罪なことをしている。所詮は日本資本主義の歯車に乗っかってやっているにすぎない。しばしば学習者がドリルに参加しない、宿題を出さないといった「抵抗」があつたのも、彼らは暗にそのことを私に伝えていたのではなかったか。

昼食時にも研修生と食事をともにすることがあった。そこでも日本語の練習が行われる。私は次第にその窮屈さを厭うようになり、食事は外で摂るようになった。すると、ある日、一人の研修生が私のテーブルの前に坐って、「オシエルオモシロイデスカ」と訊いてくる。日本語自体が面白いのではなく、教えることが面白いのかと訊いているのだ。多くの場合、私は「まあときどき面白いです」などと煙に巻くのだが、とうに「限界」を察していた研修生も多くいたのである。それからは英語の会話になったが、彼はマイケルと名乗った香港人であった。いつまでここで教えているか、もし海外の大学で勉強したかったら、紹介すると言って来たのである。もし言語を本格的に教え、研究するならば、という助言である。雲の上のような話で、私は何となく話を煙に巻いてしまったが、周囲は私を心配してくれてもいたのであった。正直に、例えばアメリカの大学に進むようなことは夢の又夢であった。そのとき、あらためて教師は教室では丸裸にされるものだ、と肝に銘じた。予習、つまり準備をしてきているかどうかまで、また体調の悪さや精神的な状況まで判定されるのだ。研修生はおしなべて私よりも年上で、社会経験も豊かであったことから、私の未熟さは、いくら日本語教師といっても、直ちに本質を見抜いていたのかもしれない。

協会の定期刊行物に『研修』というB5判で数十頁の冊子が隔付きで発行されていた。そこには研修にあたっての注意、実習生の近況、帰国後の実態などが報告されていたが、同時に日本語教育の場、といったコーナーがあり、自由に投稿することができた。ある教員は誤用例の検討を、ある者は外国語との比較対照を行っていた。私も執筆の順番が回ってきて、二年目だったか、「接続詞と基本文型について」といった小文を書いた。1976年の頃である。これが私にとって、初めての言語学的なレポートになる。研究ノートまでもいかない、メモ的なものだが、おそらく初級でひんぱんに出て来る接続詞、「そして」「でも」「しかし」「それでも」「また」「それから」などの例文と研修生の使用例を比較したものであった。その頃は、基本動詞の用法、副詞の用法などに関心を持っていたようである。掲載記事を一冊にまとめた『日本語研修の現場から』がその後限定部数、刊行されたのだが、度重なる転居で紛失してしまったのが悔やまれる。誤用分析、対照研究などが簡潔にまとめられており、当時としては先端的な研究ではなかっただろうか。なお、海外技術者研修協会の日本語教育については、川上尚恵「技術研修生に対する日本語教育の目的と実践：1959年から1980年代前半までのAOTSの日本語研修を対象に」（『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』49号、2017）の考察がある。だが、聞き取りの対象者の多くは「体制側」にあった人たち（肯定派）で、内部や外部から批判的に眺めていた人たちの意見や見方が十分に反映されているとはいえない。さらに集中日本語教育を受けた側のその後についての実態も、関心の枠外にあるように思われる。

初級日本語に徹することは、よく考えれば日本語の根幹を考えることでもあったはずだが、すぐに実用的な思考に走って、じっくり考えるいとまがない。誤用例を見てもその本質よりも、どう直すかに神経がいつてしまう。たとえば、「はい」と「いいえ」。「私」と「あなた」。「行きます」と「来ます」。「あります」と「います」などなど。日本語教師にとっ

て教案はきってもきれない道具であり、分身である。教案をつくる作業は、板前が包丁の研ぎ方、材料の切り方に精進するのと似たところがある。導入、ドリルなどを逐一、文型ごとに作っていくのだが、そのときに必須となるのが、「語彙リスト」である。つまり、各課に新出する語彙を、品詞別に書き出していったものである。「リスト」は動詞、形容詞、名詞、そして数は少ないが、接続詞、副詞、助詞（格助詞、接続助詞、終助詞など）のリストである。既習の語彙をつかって、ドリルや練習をさせる。そのための、いわば引出しなのである。動詞でいえば、まず「行きます」「来ます」「帰ります」の移動動詞、「起きます」「寝ます」「働きます」「勉強します」「休みます」といった、時点をあらわす動詞、時間の幅を表す動詞。それから、一般動詞「食べます」「飲みます」「見ます」「買います」といった格助詞「デ」を伴う動詞の導入である。動詞はすべて「マス形」で一覧化した。教師は第何課にどんな語彙が、どんな文型が出ているかを知っていなければならない。このリストは授業のドリルにも不可欠な道具で、語彙の選択には最新の注意、すなわち状況性と運用性というバランスが常に働いていなければならない。動詞は常に「マス形」で導入されるのは、活用（テ形、ナイ形、辞書形、タ形の提出順）を念頭においているからだ。

品詞別リストの作成例（動詞リストの一例）

提出課	動詞	第6課	たべます
第4課	おきます		のみます
	ねます		かいます
	はたらきます		かきます
	べんきょうします		よみます
	やすみます		みます
第5課	いきます		かいます
	きます		すいます
	かえります		……

簡単なドリルやQAにしても、偏りがあってはならない。QAも前後の関連性がなければならぬ。少しでも学習者に違和感を与えれば応答練習に支障が生じる。簡単なようでなかなか難しい。包丁の捌き方、研ぎ方を修得するようなもの、その調合は職人技でもあった。

5. 海外技術者研修協会（AOTS）の日本語教育事業

研修協会での日本語教育の“限界”は入職して数か月にはやってきた。これをどう乗り越えるかで将来の指針が決まるように思えた。だが、だれも相談する者はいない。まるで人知れずに数年して辞めていく日本語教師もいたが、私と同じような思いであったかと察する。初級日本語教育は誰が教えても同じような成果をあげなければならない。一定の規格品を作るのである。傷物があれば、研修先の企業から研修生にも協会日本語班にもクレ

ームがつく。だから、研修生の実習先を訪れ、研修生や実習担当者に面談をすることも必要だった。個性が無視される危機感を次第に感じはじめていた。卑近な例を話そう。

集中日本語コースが終わると修了式があり、企業の代表者も出席して日本語の発表会が行われる。6週間の日本語で短いスピーチをするのだ。徹夜で暗記している研修生もいたが、どれもこれもほぼ同じ内容であったのは致し方ない。語彙も文型も限られている。そこには痛みをとまなう言葉はなかった。言うまでもないことだが、研修生自身が話したいことよりも習得した日本語が優先される。例えば、「日本語は難しいですが、面白いです」という一文。これは形容詞の導入の例文だが、対比構文でもある。それぞれにとって「難しい」も「面白い」も異なるのが自然であろう。だから、そう「言わせる」ことに抵抗を覚える学生もいて当然である。教師はそれを承知で「言わせる」のである。そうした矛盾は気にしなければ去っていくが、研修生の表情を見ていると、自分の言葉として話しているようには見えない。「面白い」と思ってもいないのに、そう言わざるを得ない。好印象を与えなければ実習先の成績に響くからだ。研修生は同じような必要度、関心から学ぶのではない。たまに「日本語は難しいです、そして面白くないです」と言ったりする。だが、めったにそういう本音は出さない。型、例文は大切だが、それに引きずられて思想感情まで画一化していく。「木村さんは」とくれば「きれいで」と続け、「親切です」と終わる。この例文を覚えた研修生は職員のだれかれを捕まえては「××さんはきれいです。そして親切です」と練習する。接続表現を覚えると「××さんはきれいで親切です」とくる。ある研修生がこっそりと「きれいではありません」「親切ではありません」と、あるいは大胆に「日本語は難しいです。面白くないです」という研修生がいることは救いだった。

協会の日本語教育は体制側につく語学教育であった。初級の短期集中の日本語教育は教師も研修生もロボットになり、ロボットにさせるものであった。場違いなたとえかもしれないが、大戦末期に「総力戦」と称して、婦女子供に竹槍訓練を強いていたことを想起させた。戦時下の海外の現地でひろめられた日本語教育もそのようなものであったと想像する。現地の言葉をうばい、うばわなくとも日本語の使用を強制させた歴史に関心を持つようになって行った。協会の中には大学院に進んで言語学を学ぶ者もいたが、何冊も本を書いたケースを知らない。ある人は日本語教育史研究にシフトをしていった。

(補遺) —— 寺村秀夫の言語体験

共感と反発の渦中にあつた研修協会の日本語教育であつたが、私の日本語教育、日本語教授法の輪郭、原器を形づくったことは間違いない。さきにも触れたが、協会雑誌の『研修』に毎回掲載されていたコーナー、「日本語教育の現場から」は専任教員の現場からの授業、研究ノータピ的な報告で、数年後に一冊にまとめられたが、その内容（初級教授法、対照研究、作文にあらわれた研修生の誤り—誤用例研究）は今でも一定の水準を失つてはいない（残念ながら、この限定本は度重なる転居もあつて紛失してしまった）。おそらく当時の大阪外国語大学留学生別科の影響を受けていたこともあるだろう。

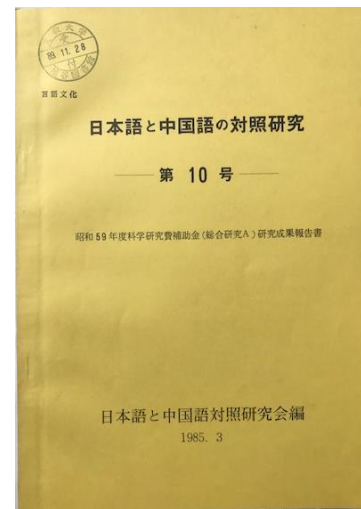
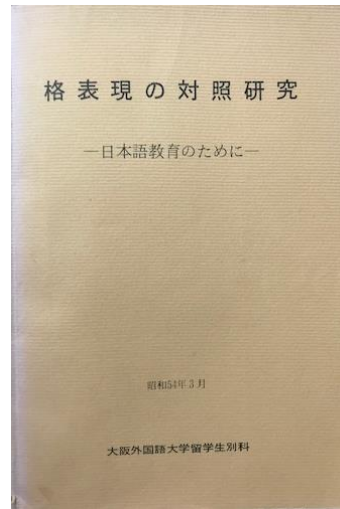
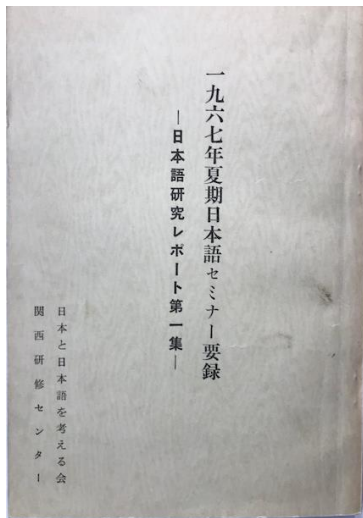
さて、この研修協会の日本語教育に若き寺村秀夫氏が深くかかわっていたことは、一部

の関係者の間ではよく知られている。昨年は寺村秀夫没後三〇年であったが、私は寺村秀夫の文法研究は、大阪外国語大学の留学生日本語教育と研修協会（関西研修センター）での研修生日本語教育の二本立てで形成されていったように思う。一方の前者は長期の、いわば綿密な研究に対し、一方の後者では大局に立った日本語の全体把握である。この両輪は何を意味するのかといえ、日本語を双方向から眺める、把握認識するという姿勢ではなかつたらうか。これは私の研修協会での日本語教育、以下に述べるタイでの日本語教育から中国での中將旧日本語教育への関心につながっていく流れとどこかで呼応している。

寺村秀夫は研修協会の日本語教育の現場のほかに、『日本語の基礎』編纂作業にもしばしば助言を与えている。ちなみに上述『研修』に掲載された記事内容は以下の通りである。

- ・「(座談会) 日本語教科書改訂版をめぐって」『研修』1966. 2
東京外国語大学助教授竹内與之助氏とともに出席。当時は大阪外大留学生別科講師。
- ・「(座談会) 日本語教育あれこれ」『研修』1966. 11
東京外国語大学助教授の竹内與之助氏、尾野秀一氏とともに出席
ユニークな5週間コース、LL の役割、日本語は国際語か、媒介語の功罪、正しい日本語を、などについて協会専任講師らと論じている。
- ・「国際語としての日本語」『研修』1967. 3
言葉の「むつかしさ」とは何か／言語の「優秀性」とは何か／日本語の発音／日本語の語・文の組み立て／日本語は「論理的」でないか／今後の課題、などを論じている。
- ・「(座談会) 日本語教育が実習の鍵」 『研修』1967. 6
- ・「カンサス大学から」 『研修』1970. 1
1968-1970 にカンサス大学客員助教授として滞在。当時は大阪外国語大学助教授

寺村は留学生別科で教えながら、常に日本語の基礎的な、根幹的な構造を研修協会実践していったと思われるが、そのあたりの内政については記述がないので想像するしかない。こうした初期の寺村秀夫の言語観、日本語・日本語教育観については、大阪外国語大学留学生別科時期の研究成果も合わせて、論集未収録著作論集の刊行が俟たれる。その他の論集未掲載のものとしては、『日本語と中国語の対照研究』掲載論文3本、『格表現の対照研究—日本語教育のために—』(大阪外国語大学留学生別科1979) 所収の「動詞と補語の結びつき—日本語の場合」などがある。なお、関西研修センターでは日本文化・日本語教育セミナーが不定期に行われ、たとえば『研修』1967年3月号、4月号には「ソ連に於ける日本語教育・研究および外国人から見た日本語の特性」(I. V. ゴロヴニン、モスクワ東洋語大学教授) が掲載されている。日本語教育では先端的な位置を担っていた。講師のなかには三上章(当時は大谷女子大学教授)の名も見える。「係り結び—特に係りの強調について」が掲載。ほかに池上禎三、渡辺実、宮地裕、佐治圭三氏らが発表した。



■寺村秀夫は対照研究にも意欲的に取り組んだ。左（1979）は大阪外大留別当時の論集で、「動詞と補語の結びつき—日本語の場合」が収録されている。右（1985）は筑波大学時代の報告書で「「対比」の構文と意味—日本語の場合」が収録されている。ほかに研究分担者は中川正之（代表）、大河内康德、相原茂、荒川清秀、田窪行則、杉村博文、木村英樹（敬称略）。

6. 日本語と異言語(1)—タイ語の世界で—

こうした初級日本語教育に慣れて行くにしたがって、このままでいいのか、という焦燥感も生まれるようになった。ドリルがスムーズに行った時の快感とはうらはらに、言語の画一性に対する反発である。そうした矢先、急きょタイに出向を命ぜられたのは、ある意味で転身の好機でもあった。タイ出向は、1970年代当時、貿易摩擦で反日運動が激しく、その「対応策」として、タイ人のための日本語教育のプログラムを開発し、タイ人向けの日本語教科書を作成するという任務である。「是正」どころか、日本語を普及させるのが目的である。矛盾しているが、命じた理事長の言葉は、「あなたの好きなようにやれ」であった。つまり、矛盾をどう解決するかは「あなた次第だ」というわけである。

タイ語の習得には苦勞した。小学四年生程度のタイ語検定試験を二年目の秋に受験して合格した。来タイ直後にタイ語学校に三カ月通ったほかは、自力で学んだ。タイ語学校でははじめて直説法の授業を体験したことは、それまでの日本語授業の裏返しでもあり、学習者の立場になって、異言語社会で異言語を学ぶ意味を体験したことは大きかった。

“ He who knows no foreign language, knows nothing of his own ”

「外国語について何も知らない人は
自分の言語についても何も知らないのと同じだ」

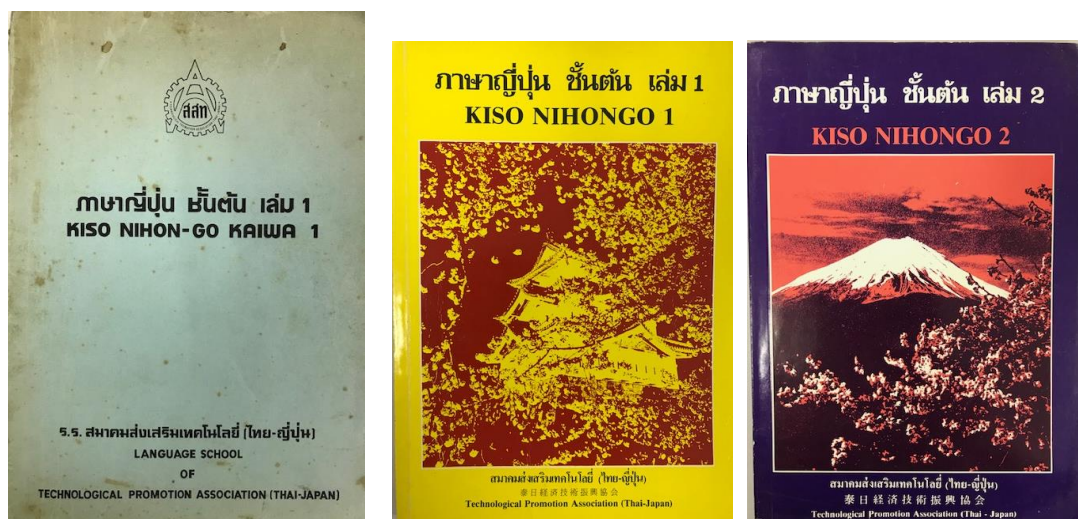
—— Johann Wolfgang Goethe

Learning another language is not only learning different words
for the same things, but learning another way to think about things.

別の言語を学ぶことは、単に同じものの別の呼び方を学んでいるのではなく、異なる考え方を学んでいるのです。

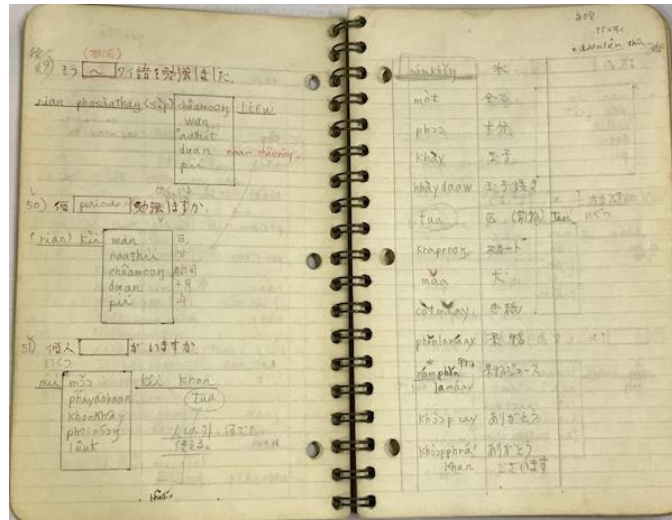
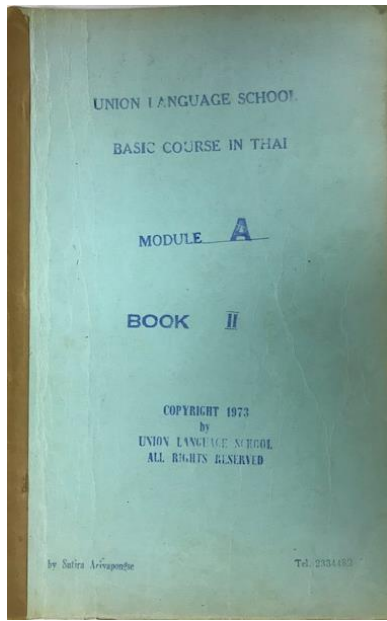
— Flore Lewis

タイでは主として日本語教科書の開発に従事したが、日本人のためのタイ語テキストを開発する任務もあった。そういう次第で、タイ語の修得には人一倍二倍精を出さなければならない。タイ語の環境にどっぷりつかると同時に、自分から進んでタイ人の庶民の住むところに住まいを変えて、彼らとの接触交流を始めた。職場では帰国留学生が多数いて、タイ語だけで用を足すことがむずかしく、つい日本語や英語に頼ってしまうからであった。それで効果があがったかどうかは分からないが、タイ語に向かい合う軸のようなものは育ったのではないかと思う。タイ語にも楷書、行書、草書がある。タイ人の書いた筆跡をまねて、何とかタイ人のように書けるようになりたかった。ゴミ箱に捨てられていた紙を拾って練習したこともあった。タイの小説をノートに書き出し、難解な語彙を右に書き出すノートも数冊作成した。当時のタイ語練習ノートが数冊残されているが、かなり苦労した足跡がしのばれる。当時使用したタイ語のテキストも残されているが、これは将来、自分なりのタイ語学習書を作成したい、との思いがあったためである。だが、これも恥ずかしいことに実現されていない。数冊タイ語学習書は刊行したものの、「本格的な」ものは、依然として手の届かないところにある。

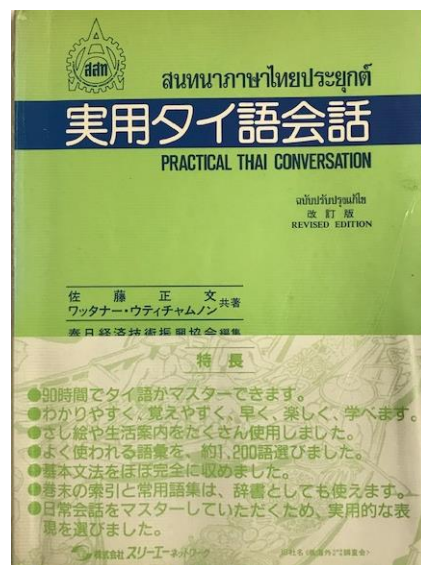
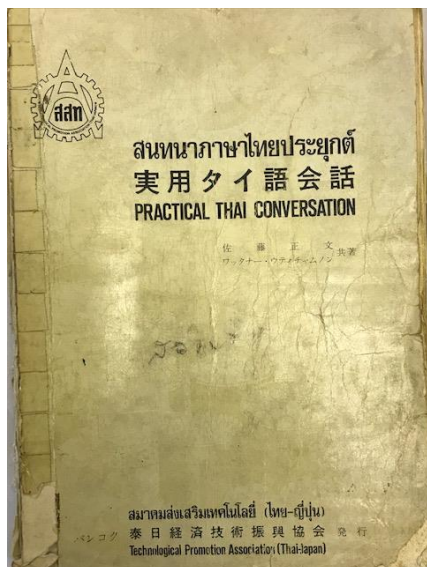


左は最初に謄写版刷りを製本した KISO NIHONGO KAIWA 1 1978年 右2冊は完成版 1979年

開発された『実用タイ語会話』はおそらく日本人に対する最初の本格的なタイ語学習書であった。日本人とタイ人の協力で開発されたが、そのヒントになったのは、海外技術者研修協会で作成された「日本語の基礎」の逆バージョンであった。また、タイ人向けの日本語教科書も『日本語の基礎』を再度「解体」することから始まった。そこでこれまでの集中日本語コースのシステム、構造がよりはっきりと自覚されてきたのである。どれほどの努力を学習者に強いてきたのか、という現実には自分で体験してみなければ分からない。



直接法で学んだタイ語テキスト（初級編の一部）当時のタイ語学習ノート左：文型練習 右：新出語彙



日本人のための初めてのタイ語学習書（左：初版1977 右：改訂版1980）

日本に帰国してからも自学自習を続けた。二冊の文字編と読解編のタイ語テキスト（試用版）を完成させた。また、タイ文学の作品の翻訳に取り組むことも考えたが、これは力が及ばなかった。負け惜しみではないが、翻訳に携わるには、やはりネイティブの伴侶が必ず必要である。地域研究もそうであるが、文学や言語では致命的である。その意味では多くの外国語教師が当該外国語を母語とする配偶者を得ていないのは私から言えば勿体ない話である。両言語が武器となり、重武装が可能である。中国語が専門なら中国人、ドイツ語が専門であればドイツ人。現地調査にも有利であることは間違いない。私の知り合い

の英国人日本研究者は多くが日本人と結婚している。彼から本音を訊いたことがあるが、奥さんの里帰りについて一緒に行けるし、日本語のことなら何でも聞けるからだ、という。タイ文学の翻訳家になろうと思えば、タイ人と結婚するのは必然的なことだと思う。私もまたタイ語に入れ込む気持ちはそれほど強くはなかったということになるだろうか。やはり最初の中国語に戻ったことになる。話がわき道に逸れた。

タイ語学というほどの高みではないが、十数本の研究論文をまとめて刊行したのは2004年であった。科学研究費助成により刊行することができた。だが、所詮、参照文法の域を出るものではなく、純粋な研究書とはいいがたいものであった。やはり記述だけでは限界があり、理論を一つでも確立しなければならない。その後も報告書のようなものを限定版で刊行したが、フラストレーションはたまったままである。日本語タイ語学習辞典のようなものも構想し、数種類の学習書の巻末語彙を収集し始めたが、これもお蔵入りとなっている。タイ語初中級文型集、タイ語慣用句集の開発も実現にはほど遠い。

今、少なくとも思っているのはタイ語文法書の執筆、さらに主要文法書の邦訳である。タイ人の日本語学習者に比して、日本人のタイ語学習者数は格段の開きがある。勢い、タイ人のほうがタイ語日本語の対照研究に取り組むことになり、日本人側からの日本語タイ語の対照研究の取り組みは限定的である。2013年から『日タイ言語文化研究』という学術誌を自費で刊行し始めたが、当時の使用したテキストがまだ多く残されているが、あと数年かけて、タイ語学習書、文法書を作成してみたいという気持ちは残っている（後述）。

7. 日本語と異言語(2)―中国語の世界で―

中国語は大学学部時代から第2外国語として学び続けてきた。大学でどのような外国語を学ぶかによって将来の進路が決まる。そう思っていた。専門が中国歴史だったこともあるが、この度の記念論集では教え子たちが多くの論文を寄稿していただいたが、日本人は極めて少ない。日本人研究者は数ある学会誌でも投稿者を見ると中国人研究者が大部分をしめ、日本人研究者の投稿者数は少ないという声を聞く。

中国で日本語を教えてみたい。そう思うようになったのは、初級日本語教育に限界を感じたこともあったが、若き日に思い描いた中国に行くチャンスは、今しかないと思ったからである。改革開放経済にわく中国の現実を肌で感じて、暮らしてみたい。それは誰にもまして切なる思いであった。これからは中国との関係構築が重要になる。そのための人材養成にも貢献したいとも思いも強くあった。

赴任が決まったのは、中国の湖南省にある湖南大学である。1983年の12月、招聘状がとどいたときは急に力が抜けた感じで、郵便箱から取り出して封を切った瞬間、思わずその場でうずくまってしまいそうになった。出発まで二箇月もなく、部屋の契約の打ち切り、荷物の整理などに追われ、出発を控えた一週間は不眠の日々で、疲労も限界、出発当日は東京都心から成田までタクシーで向かう始末だった。北京で四日間静養し、ついに湖南の地をふんだのは二月の厳寒の日であった。武漢の長江大橋を渡った時は、ああ、中国へき

たのだ、という感動が胸を打った。そして早朝、駅頭で周炎輝教授の出迎えを受け、駅からまっすぐに伸びる「五一路」を抜けると湘江大橋があり、ゆるやかな坂道をのぼると湖南大学があった。岳麓山を背景に、毛沢東の巨大な彫像がそびえる東方紅広場をさらに横切って到着したのが。宿泊先の望江楼であった。

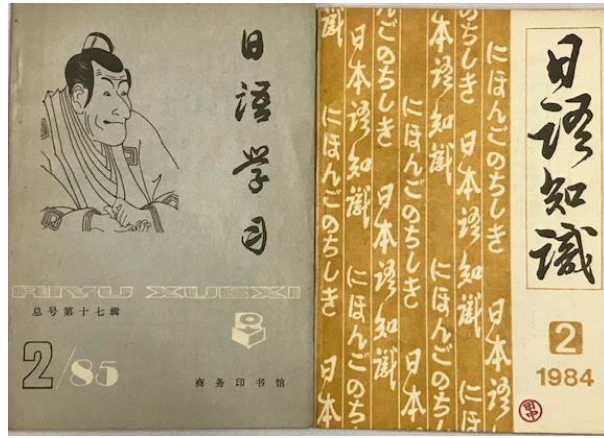
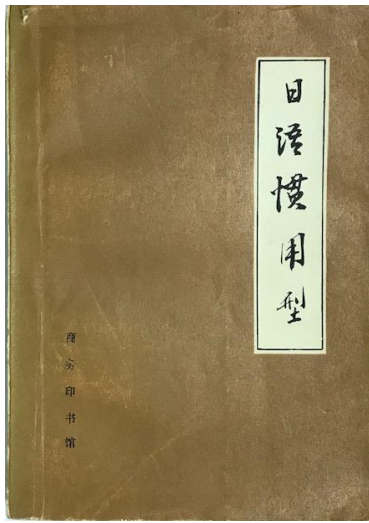
私の湖南大学での思い出は尽きることがないが、刊行予定の本記念論集の巻頭言を書いた劉曙野さんも当時の大学院生である。そのときの様子がつい昨日のここのように思い出される。また、執筆者の一人張佩霞さんも当時、劉さんと机を並べた同窓である。こうして30年以上も長く交友、交流が続いていることは私の至上の喜びである。

湖南大学に決まったのは、私にとって生涯の幸運であった。まず日本語教研室主任の周炎輝先生との出会いである。研修協会を辞職した私は中国からの招聘状をまつ間、都内の日本語学校で半常勤の日本語教師として勤めることになった。いつ来るかわからない不安な日々であった。ある日、神保町の内山書店で一冊の日本語の本を見付けた。周炎輝『日語慣用型』である。日本語の文型を詳しく分類したもので、文法書とはいえないが、中国人の発想する実用的な視点がここにあると思ってさっそく購入した。私の日本語教育は初級を中心に「文型」から始まったわけで、文法研究といえば文型研究であったことから親近感を覚えたのである。人生とはわからないもので、その著者から招聘状が届いたわけだから、偶然というべきか運命というべきか、いまでもその時の感動は忘れられない。

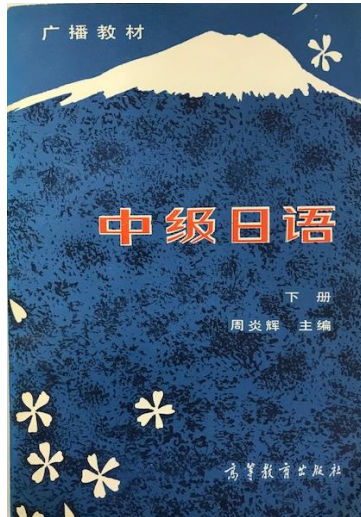
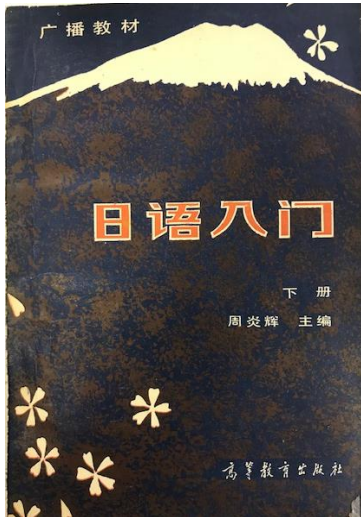
言語研究をはじめた人にはそれぞれに重要なきっかけがあるはずだが、私には人生を決定づける出来事が、34歳の時に訪れたのであった。だが、ただ偶然ではなかった。招聘の大きな理由として、私が十年近く技術研修生の日本語教育に携わっていたことが、理系大学の湖南大学の目にとまったのである。そのことを、着任してすぐに周炎輝教授から説明された。同時に、私は持参した『日語慣用型』をお見せし、旧来の知友のような関係がここに誕生したのであった。会うべくして会ったという奇蹟的なめぐり会いである。

振り返れば故木村宗男先生に紹介された宋文軍先生（当時、北京対外貿易学院教授）、そして周炎輝先生にお会いしたことは、不思議なめぐりあわせであったというほかない。

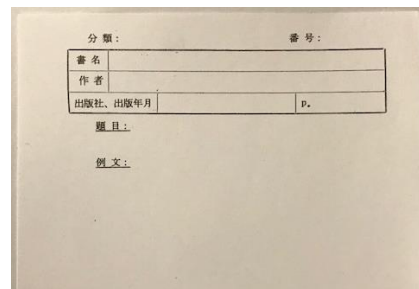
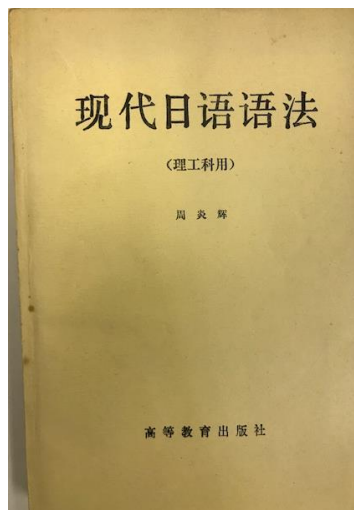
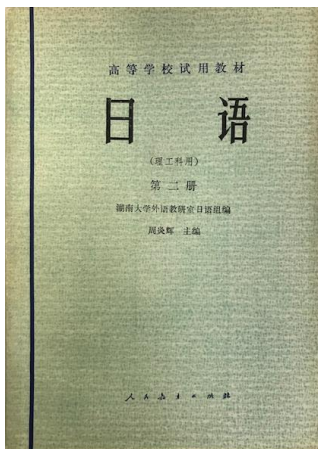
ところで、改革開放政策に沸く中国では未曾有の日本語ブームで、『日語知識』、『日語学習』といった学習雑誌、『日語学習與研究』という研究学習雑誌も購買数を伸ばし、書店でもさまざまな日本語教科書、参考書を目にするようになった。まさに百花繚乱といった状況であった。日本国内の日本語教科書の海賊版も多く出され、大学近くの外文書店はいつも学生の姿があった。日本の映画も輸入され、毎週放映の連続ドラマは庶民の楽しみの一つとなった。日本語教科書ではそれまで日本の国際学友会や国際基督教大学、東京外国語大学付属日本語学校（当時）のテキストの中国語訳版が使用されていたが、やがて人民教育出版社と光村図書との共同編集により『中日友好標準日本語初級』が出版される。この時期の日本語教育の歴史と同時に、教科書教材研究はもっとなされるべきであろう。



元祖『日語慣用型』陳書玉 1980 學習雜誌『日語學習』、『日語知識』1984 當時



中国で開発された放送教材『日語入門』、『中級日語』、學術雜誌『科技日語』1985 年當時



『日語 (理工系用)』 周炎輝著『現代日本語文法』(理工科用) 用例收集カード 100×150 mm

当時の中国では北京の俗称大平学校、日本学研究センターで主任をつとめられた佐治圭三先生（故人）の指導、影響もあり、類義語研究、誤用例検討の研究が積極的に進められ、その成果は雑誌『日語学習與研究』などにも掲載されるようになった。この類義語分析については方法論をめぐって、ある種の議論があったとも聞かれるが、日本語研究の底上げにつながったことは確かであったように思う。

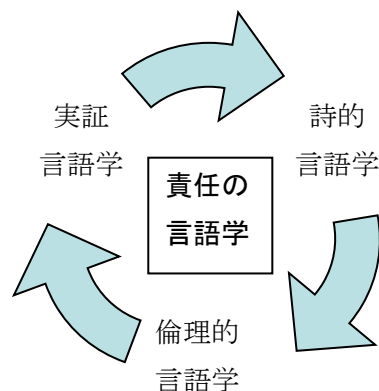
8. <責任の言語学>という自己命題

さて、そろそろ標題の副題<責任の言語学>について語らなければならない。

たまに、こういう質問をする学生がいる。「どうして日本語を研究しますか」「言語を研究する目的は何ですか」。現代の若者は、いつでもそうだが、すぐに結果を求めやすい。確かに言語の仕組みを理解し、効率の良い教え方に反映させれば、大きな社会貢献になりうるだろう。だが、それだけでいいのだろうか。

退職を控えたある日、私の敬愛する歴史学者から一通の手紙が送られてきた。というよりは、実際に「手渡された」のである。実名は伏せるが、K大名誉教授のM先生は、自らの歴史学研究の歩みを記され、「実証歴史学」「詩的歴史学」「倫理的歴史学」の三本の軸を自らの歩みにあわせて語られ、この三本を統合させて<責任の歴史学>とされたのである。

この自己省察は私に対する大きな問いかけであった。ならば私の言語研究の柱とは何だったのか、と。私は追い立てられるようにして、私なりの<責任の言語学>を詰問されているような気がしたのである。「**実証的言語学**」。これは記述文法と理論文法に分かたれるが、つまり実用語学である。内部構造に向き合い、ひたすら言語の特徴を追窮する。これがほとんどの場合に当てはまるだろう。年間、どのくらいの論文が書かれるのだろうか。日本語教育文法、対照言語学、談話言語学の領域もそうだろう。次に「**詩的言語学**」。これは日本語の発想、思考様式などを明らかにする。日本語論である。その代表は池上嘉彦氏を揚げたくなるのだが、ご本人に確かめるすべはない。後述する文学と言語の交渉、あるいは文体論などもこれに属するかもしれない。そして「**倫理的言語学**」。これは二番目の「詩的言語学」と重なりを持ちながら、しっかりと歴史を見据えている。日本語教育史研究、とりわけ負の遺産として戦時期における日本語の普及の検証は、その一試行であろう。



三本の軸はバラバラではなく、三脚のようにして佇立しているのである。あるいは連環しているといった方がよいだろう。

以上、性急に感じたことを述べたので、M先生にはまだ報告できずにいる。ともあれ、この三本の軸こそ、そしてその統合の在り方こそ、私がずっと追い求めてきたものかもしれない。M氏のご提言に心から感謝している。

“ If you talk to a man in a language he understands, that goes to his head

If you talk to him in his language, that goes to his heart ”

「相手が理解する言語で話せば、相手は頭で理解してくれる
相手の母国語で話せば、相手の心に通じる」 —— Nelson Mandela

歴史学者に常に突き付けられる宿命的な命題、社会貢献は、言語学、言語研究・教育に携わる者にも等しく享受されなければならない。それは言語学自身の自立的な運動である。また、それは一人一人の研鑽、知的好奇心の精進によってしか得ることはできない。

9. 対照研究と日本語教育

中国での研鑽のあと、私は現地で結婚した妻とともに日本に帰国、あらたに日本語研究を目指すことになった。大学院を受験するにあたり、タイ語、中国語学への関心もまっくなくなかったわけではなかったが、やはりここまで来た以上は日本語学をきわめるしかないと決心した。その過程で、タイ語も、中国語も続けて行くことにしたのである。これが私の対照研究の出発の内実であった。日本語とタイ語の対照研究では、以下のものがある。

- (1) 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』ひつじ書房 2004
- (2) 『日タイ対照研究の諸問題 意味と構文の研究』語学教育ジャーナル 28号 2018

(1) はどちらかといえば参照文法、文典に近い。(2)は特定の対象について、(1)の補遺的な研究である。いずれ正式な出版を目指すべく準備しているところである。もちろん、正式な専攻研究者の側から見れば、実に粗削りな成果であろう。だが、どのような形であれ、その実践の成果を形にして残すことは、教えて来たこと責任でもあった。学内、学外の紀要や雑誌に発表したものを項目別にまとめたものにすぎないが、いくらやっても氷山の一角という思いは消えない。「諸問題」、「一考察」といって言い逃れをするのはそのためであって、それぞれの成果はドアをノックし、覗いてみたようなものかもしれない。とはいえ、正真正銘(?)のタイ語学の研究者がまとめた研究書を出さない(出せない)以上は、本書も参考文献の一つ、二つに置かれることになる。これもまた「**実証的言語学**」のあるべき姿で、**<責任の言語学>**の一つに据えられるゆえんなのである。

外国語との対照比較の重要性のひとつは、その言語発想の違いに気づかされることであ

る。ほんの一例だが中国語の例を挙げよう。日本語も中国語も、瞬間ひらめいた状況を適切に敷衍する際に、慣用的な言い回しを用いることが少なくないが、長い言語文化の歴史に支えられているだけあって、量的には中国語のほうがはるかに多いことを実感する。たとえば、相手、もしくは自他ともに戒めるときに発する言い方がある。

喉元すぎれば熱さを忘れる。

；好了傷疤忘了痛／好了瘡疤忘了疼。

日本語は瞬間的な変化とそれによる出来を条件法で述べている。感覚的である。中国語はさらに具体的で傷が治っても傷口は残るといふ、教訓的な水位が高い。前後が普遍的事実であることから、条件法は用いずに、「了」をそろえた意合法的な構成となっている。言語の違いは形式間の違いのみならず発想の違いをも明らかにする。違いを知ることは相手を知ることであり、自分にはないものを知る収穫である。

10. 日本語教育史研究への指向

日本語文法学の一方で日本語教育史研究に関心を持ち始めたのは、1990年代の終わりころからである。具体的には私の妻の両親が、かつて旧満洲国時代に日本語教育を受けていたことが何より大きいように思う。余談にもなるが、当時、親しくしていた中国語学知人（故人）にこの方面での研究の関心話を話したところ、やめたほうがいいとたしなめられた。それは異常なほどの反対の仕様であったので、彼もまた日中同形語研究のほかに聞一多の研究もやっていたので、私は全方位的な視界を欲していたのだが、彼は軸足を離れることの不安を語ったのだろう。親身な助言ではあったが、私にしてみれば歴史の触角が働いたというほかはなかった。＜責任の歴史学＞と振り返る根拠である。

上記の「倫理的言語学」の外縁である。1990年代の末ごろから着手した。その大きなきっかけは妻の里帰りに同行するうちに、黒龍江省社会科学院の歴史研究者に遭ったことである。その人の名は歩平先生というのだが、残念なことに70歳を前に2016年に突然死されたのである。享年68歳であった。彼は、体制的な歴史学から脱して新しい歴史学を目指し始めた矢先のことであったので、その死は多くの関係者の中で悼まれた。私がほぼ二十年におよぶ交友の中で先生から学んだことは、他者の痛みを知ることであった。

これは言語を共時的な関心だけにとどまっていたとは分からないことも多い。同時に通時的な関心をクロスさせる必要から生まれた。私についていえば、日本語文法学の一方で日本語教育史研究に関心を持ち始めたのは、1990年代の終わりころからである。具体的には私の妻の両親が、かつて旧満洲国時代に日本語学習を強いられた歴史を持っていたことも大きな事実である。以後、文法研究、対照研究とあわせて少しずつ、自分なりの方法論を開拓していったが、満洲国のほかにタイでも早期から日本語教育が始められていたことを知り、壮大な日本語教育史研究に取り組むことになった。その成果は、2015年に『戦時期における日本語論・日本語教育論の諸相』（ひつじ書房）にまとめられた。同書には中国大陸での日本語の進出、満洲国における日本語教育、さらに東南アジアにおける日本語教育

をとりあげ、その歴史的な推移について詳述した。新刊の『戦時期の日本語進出と言語文化建設——南方諸地域を中心として』（学内刊行物）は姉妹版、続編であるが、戦時期の新聞に寄せられた記事なども検証している。これからもデータベースの作成など課題は山積している。大空社出版から、戦前のタイ語研究の実態について復刻作業を進めているのもこうした研究の一環である。

1 1. 言語と文学のはざままで

最後に「詩的言語学」について。文学については、以前から雑文を書き続けていたが、2006年に南京を訪れ、南京大虐殺に題材をとった創作「わが南京アトロシター」が『文学界』新人賞第一次選考に残ったことを契機に意識して取り組むようになった。はじめての商業出版『母といた夏』（アルマツト2012）は、幸い、好評を得たものの、出版社の倒産で「幻の著作」となった。自伝的な私小説を中心に組んだものである。そのほか、『ハルビン 残照 731の記憶』、少年期の体験を書いた『帝国の夏』など、いずれも私製本にして知人に読んでもらったりしている。また、大学では文学の科目も進んでもつようになり、従軍作家、徴用作家に関心を持ち、10年近く戦争文学を読むという趣旨で講義を続けた。戦争文学に関心を持ったのは、日本語教育史研究の影響もあった。それらの成果は、大学の紀要などに発表した。なお、2014年には「ハルビンの光の中で」が埼玉文芸賞を受賞したが、在職中にメジャーな文学賞を獲得できなかったことは悔やまれる。専門研究と伴走、両立しての創作活動がいかに困難であるかを痛感したが、所詮は精進不足であった。

青春の文学への志を正面から考えるようになったのは、親兄弟の死に直面してからである。また、1990年代の後半から、高橋和巳の弟子、歌人、作家の太田代志朗氏との出会いも大きな契機であった。太田氏は高橋和巳らが主宰していた第二次「対話」同人の一人で、生前の高橋和巳と親交のあった方である。人は出会うべくして人と出会うのである。

記憶に残るのは、2018年秋に『高橋和巳の文学と思想』を太田氏と上梓したことであった。大学二年生の時に遭遇した＜高橋和巳の死＞以来、私には、高橋文学に対する関心が継続しており、2016年にロンドン滞在中に論集刊行を決意した。高橋和巳研究者に手紙を書き送り、総勢、24名の論攷を掲載したが、この編集も書誌研究、年表なども担当し、精力を尽くした感があった。なお、現在も、高橋文学については、知人らと研究誌を出すべく準備中である。高橋和巳の死は「大いなる青春の死」と称されたが、私の青春はまだ終わっていない。どころか、ますます壮絶さを増しているようである。

一方、私は夏目漱石にも大きな関心を持ち続けてきた。今だから告白するが、二度のロンドン滞在中も漱石への思慕がそうさせたのである。私の古希・退職記念論集としてききほど刊行された『全地球時代からの人文主義』（新世紀人文学研究会2021.3）に収めた「我がピトロッホリーの日々—漱石のスコットランドに寄り添って—」は、私がどのようにして漱石に寄り添ってきたかを書いているのでご一読いただければ幸いである。

1 2. おわりに—私の日本語研究の現在—

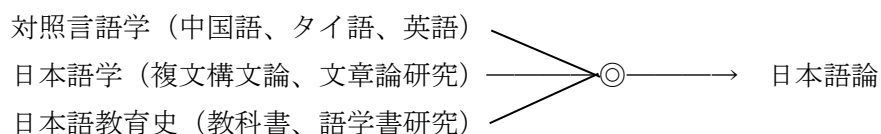
私自身の関心は文法研究の中では主として、対象とした。最近、上梓した複文研究を合わせて三冊を何とかまとめたのだが、書名は次のとおりである。

- (1) 『日本語複文表現の研究 接続と叙述の構造』 2004. 3 白帝社
- (2) 『複合辞からみた日本語文法の研究』 2010. 3 ひつじ書房
- (3) 『日本語複文構文の機能論的研究』 2021. 3 ひつじ書房

なぜ複文かといえば、物事の生起にはすべて原因があるという認識である。複文には原因理由節、目的節、条件節、時間節といった論理的ともいえる展開、結合があり、その内実をできるだけ文脈の展開の中でとらえようとした。62歳で世を去った寺村秀夫氏は名著『日本語のシンタックスと意味』を5巻で完成させる構想を抱いていたという。その成果は3巻のほかに論集が二冊あるが、私も寺村秀夫に倣って3冊はまとめたと思ってきた。タイ語学、日本語教育史研究に手を伸ばさなければ5冊は夢ではなかったはずだが、これは私自身のスタイルを通したというほかはない。

以上、日本語教育に従事しながら、日本語研究と、それを取りまく言語研究の歩みを書きだして見たわけだが、なかなか結論めいたことはうまく言い表せない。言語学とは、日本語学とは何か。一般人にも分かりやすく読める著作があってもなかなか言い表せない。あえて言うならば、自己内省、自己省察の学問、ということになるろうか。言葉に、言語に内在する真義、真偽をみきわめる。そのことで社会を見る眼を正しくする、ということか。コロナ禍の時代になって、さまざまな人間の生態、醜悪さがあぶりだされたというし、自分でもそう思う。報道メディアの杜撰さ、そして保身、忖度、隠蔽の数々。何が正しいのか翻弄される。だが、言葉の内省する力があれば負けることはない。翻弄されても自己修正がある程度可能になる。言語を研究した背景から、私は昨今の報道の在り方に疑問を持つようになり、また何を指針に生きて行けばよいのか、逐一立ち止まって考えるようになったと思っている。

私の理想をいえば、次のような言語観、言語図をこれからも見つけて行きたい。



日本語論ではかつて『日本語の視界』(1998)、『日本語の境界』(1999)、『日本語学と日本語教育学のために』(2008)、『日本語の心理構造』(2013)を私家版として執筆したが、これをさらに改変改稿して独自の日本語論を構築したい。その柱は、ヴォイス論、形式名詞論、接続論、文末論などを構想している。そのためにも共時的な視点として「対照言語学」

が、通時的な視点として「日本語教育史」が貴重な知見を与えてくれると思っている。

文章論では私家版「日本語文章読本」の作成である。文章読本は数えきれないほど多いが、私なりに名文と呼ばれるものを採集して演習も兼ねた、つまり教材と、テキストとしても使用可能なものを手掛けたい。昨年から作り始めた『現代日本文学を読む 文学で学ぶ日本語』（試用版）を作成した。全17章、主として短編小説を収めている。趣旨は文学という言語から表現の意味をくみとるという作業である。この作業は「詩的言語学」の軸のなかに収まることになる。だが、ただ単なる言語資料としてだけ読まれることは希望しない。またここ数年、戦争文学の講義も担当してきたことから、同じような趣旨でアンソロジーを知人たちと作る計画もすすめている。

もうひとつは複合辞の用例集である。先に『現代日本語形式語辞典』を作成したが、これをさらに整備して、解説をつけくわえたものを目指したい。複合辞、形式語研究は記述研究の大きな柱であり、日本語教育の領域だけでなく、日本語の表現的特徴をさらにほりさげるためにも重要な研究課題である。

最後に、最近の関心について、モダリティの本質への疑義をお話したい。

文法研究で最大の山のひとつが**主観性の問題**である。新著の序説でも事態把握と主観性、客観性について概説したが、ここではさらに踏み込んでみたい。たとえば、コロナ禍の時代で<義務>について考えることが多いが、そのことと<確信>の考え方について私見を述べる。これは各人のとらえ方が一様でないことから発している。

これはまた他言語との対照比較によって自らの立ち位置が測れるようになる。その一事例として、ここ数年、タイ語との比較対照の中で試みているが、以下はその概要である。

義務という概念を深く考察することは、さまざまな認識の本質を再考することにつながる。そもそもモダリティとは、後付け、後出しのような「名づけ」に過ぎないにも思える。たとえば、人間がある事態に遭遇し、対峙したとして、そこで受ける受動的、能動的行為判断は、外界からの何らかの刺激によってもたらされる。そこにその時、その場の対応がある種の衝動とともに起り、それがさまざまなモダリティに分岐する。最初は無意識である。意識はあとからついてくる。精神倫理学者内海健は著書『金閣を焼かなければならぬ 林養賢と三島由紀夫』（2020 河出書房新社）のなかで次のように述べている。

（▼は改行。傍点は引用者）

実は、われわれの意識は遅れることによって成立しているのである。この遅延は解消できない。だが、それをある意味で逆用しているのである。いうなれば、後出しであり、後付けである。▼気づいた時にはすでに事は出来している。もはや取り戻すことはできない。だが、それについて語ることは可能である。すでに到来した感覚刺激に対して、「私は見た」と構成することができるのである。つまり、遅れとは語るための、経験を組織化させるための時間となっているのである。▼遅れることは意識の条件になっている。遅れるからこそ、われわれは認識する。そこに書き換えるための余

白を見出しているのである。意識は現実とピタリと一致することはない。そこには差異がはさまれている。(『金閣を焼かねばならぬ 林養賢と三島由紀夫』p.45)

長い引用になったが、思い当たることは少なくはない。例えば、テニスでサーブを打つ際に二つのボールを見比べて一つを選ぶのは恣意的である。これでなければならない決定的な因子があるわけではないが、結果として選別される。そして、あのボールを打ったことが勝利につながったと信じて疑わない。こうした例証は周辺にもいくらでもあるだろう。

さらに内海はパスカルの「信仰への疑念に苦しむ人に対して、まず祈るように諭した」という逸話をあげ、神を信じるがゆえに祈るではなく。祈るというプロセスの中から、「信仰が立ち上がる」という。理屈を言うのではなく、まず教会へ足を運ぶのである。これは実際に私も体験したことであった。さらに、内海はウィリアム・ジェイムスの「われわれは悲しいから泣くのではない。泣くから悲しいのだ」という述懐をあげている。泣くという行為によって、改めて悲しみの深い淵に立つのである。

動機とは、あくまで経験の舞台の上にある。それは経験を組み立てる道具であり、部品である。それによって人は落とし所をさがす。一般概念でいう「主観」や「主体」は

哲学者廣松渉は『共同主観的存在構造』(2017、岩波文庫)において、あるものがあるものとして認識するとはどういうことなのか?われわれはいかにして「一つの世界」を共有し、その世界はどのように構造化されているのか?人間を「共同主観的存在」と見る立場から、認識論の乗越えと再生を目指した。最近では、また國分功一郎の『中動態』にも共感するところが少なくない。能動態と受動態といった二極の態では片付かないものがあるからだ。

しばしば国会の質疑、あるいはぶら下がりの説明において、「と認知記しております」「と承知しております」と繰り返したところで、視聴者の大方はそうじゃないだろう、稲ペイではないのか、といった不信感を抱かされかねない。賛同する人はよほど関心のない、または「認識」「承知」に賛同する方か、寛大な方であろう。かように解釈の仕方というのは、主観、客観にとはべつに第三観があるように思われる。

また、たとえば、ある広告にあった日本語を見てみよう。「止まるか?子供。」「止まれるか?車。」とあるのは、「安全はトヨタの願い」という1980年7月の広告である。この二つの発話は誰のものだろうか。クルマのドライバーだろうか。子供だろうか。よく考えれば、第三者、つまり周囲を歩いている人である。さらに、このポスターを見ている読者である。この「か」の「だろうか」の推量は、従来のモダリティの範疇では片付かないように思われる。ヒヤヒヤしてみている、総体的な、包括的な現場の視点である。ヴォイスにかかわる視点も重層的、多層的であることに変わりはない。

私たちはどうしても既存の価値観、思考の枠組みを意識し、それに依拠して物事を対象化する。そこには一片の疑い、怪しみもないように思える。先行研究であれ、それを書かなければ認められない、といったある種の錯覚が高じた強迫観念である。だが、そのひとがどれだけその先行研究に知悉したと言い切れるのだろうか。



「幼児の交通事故は、毎年『飛び出し』が最多原因。ドライバーのみなさん、安全運転をこころがけてください。トヨタからのお願いです。クルマを子供の敵にしないでください」

「止まるか」の「か」、「止まれるか」の「か」は、誰の側に立った見方か？

- ・ 子供
- ・ ドライバー
- ・ 通行人、その他

一元的、単層的にではなく、多元的、重層的に見ることが肝要である。

私は複文研究を主に進めてきたが、なぜこういうのだろう、という疑問が絶えずあった。「ポーっと生きていると5歳の女の子に叱られる」という文がある。ひとつひとつの文構成のパーツ、つまり「ポーっと」「生きている」「5歳の女の子」「叱られる」という状態、行為、対象、出来。ふたつの事態「ポーっと生きている」「5歳の女の子に叱られる」をつなぐ「と」の機能。そして、全体としての伝達する文意である。また、「ゴムが伸び縮みするのはまるで水のようなだから」という「のは」と「だから」の呼応・共起構造は、「なぜ」に対する答えなのだが、これは専門のさまざまな研究から生まれた説明語、説明表現である。こうした内的事実と外的事実との交渉を考えることは言語の領域にとどまらない。

私は凡ての人間を、毎日毎日恥を搔くために生れてきたものだとさえ考えることがある。

(『硝子戸の中』十二)

人間はある目的をもって生れたものではない。最初からある目的をこしらえて人間に押し付けるのは、人間の自由を奪うことになる。だから、生きる目的は、生れてきた人間本人が自分自身でつくったものでなければならない。自分はこうしたいという、「自己本来」の目的こそ、生きる目的である。

(『それから』十一)

ああここにおれの進むべき道があった！ ようやく掘り当てた！ こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安ずることができるのでしょ

容易に打ち壊されない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡げて来るのではありませんか。

(『私の個人主義』)

参考資料

田中寛「わが青春の日本語教師—異言語・異文化との邂逅と格闘—」『順逆と修羅 人文主義への探究』(近刊) 所収



関西研修センターにて カタールから来た研修生 中央筆者 26歳当時



アラブ諸国からの研修生とともに 後列左端筆者。1976年春



関西研修センターにて ミクロネシアの研修生とともに 1975年当時



タイ、バンコクでの日本語教師時代 後列右端 1979年当時



タイ、バンコクでの日本語教師時代 LL 授業を担当 1979 年当時
泰日経済技術振興協会では当時、最先端の LL 教室を備えていた。



タイ、バンコクでは庶民の生活に溶け込むために長屋生活を送った。1978 年当時



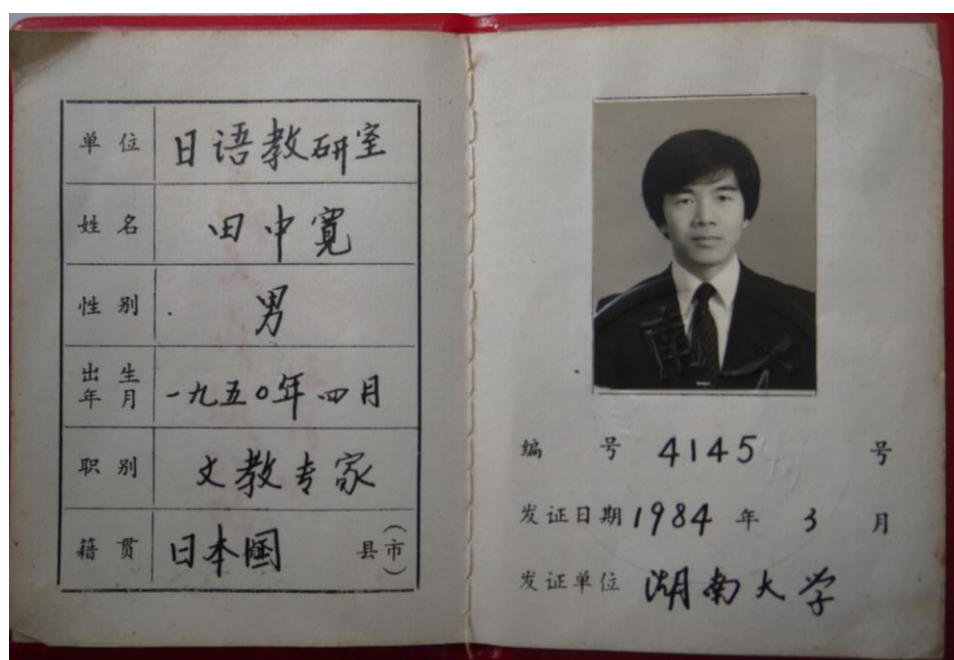
バンコク、日本語クラスの修了式で 右端筆者 1979年当時 29歳



タイから帰国後、海外技術者研修協会東京研修センターにて 1982年当時



湖南大学第一期の日本語研究生（修士院生）卒業写真 周炎輝先生と六名の院生たちと。今も彼らとの交友は続いている。右は湖南大学工作証



湖南大学工作証 文教專家



湖南大学專家楼にて 1984年着任当時 ここに骨をうずめるか、孤独な闘いが
はじまった。当時は電気も水もよく「停電」「停水」した。



湖南省長沙在住の外国人專家たちと洞庭湖に遊ぶ。彼らもまた、それぞれ中国を憧憬して、運命
に導かれて、湖南にやってきた。それだけに意気投合した。1984.6



日本語を学ぶ学生たちと岳麓山、愛晩亭を散策 1985.5



日本語を学ぶ大学生たちと。1985.5 学生はとても素直で、まじめで、日本語を教える意味を教えてくれた。私を兄のように慕ってくれた。



改革開放政策の進む中国。湖南大学構内の大きなスローガン 1984.5
中国は第二の開国を目指し、前途洋々の出帆であった。



湖南大学では院生指導のほか、理工系学生の日本語教育に携わった。



生涯の恩師、湖南大学周炎輝先生ご夫妻と妻と 中国の新春を祝う。1985. 1



大学院学位審査で来校された上海外大の王宏先生達と 岳麓書院にて 1984. 11